

伊丹市

# 原田西遺跡 2

－ 猪名川流域下水道事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －



令和 2 (2020) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

伊丹市

# 原田西遺跡 2

－ 猪名川流域下水道事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

令和2（2020）年3月

兵庫県教育委員会





# 例 言

- 1 本書は、伊丹市岩屋に所在する原田西遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、猪名川流域下水道事業（3系急速ろ過池増設）に伴うもので、兵庫県阪神南県民センター西宮土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
- 3 調査の推移は以下のとおりである。  
(発掘作業)  
本発掘調査 平成26年6月2日～平成26年7月25日  
実施機関：(公財)兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部  
工事請負：新日本建設株式会社  
本発掘調査 平成26年11月4日～平成26年11月6日・平成26年11月11日  
実施機関：兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財課  
(出土品整理作業)  
平成31年4月1日～令和2年3月31日  
実施機関：(公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
- 4 空中写真測量は、株式会社日建技術コンサルタントに委託し、実施した。
- 5 調査成果の測量は、四等三角点園田配水場・1級基準点2009A・2級基準点FK427を使用し、3級基準点を設置した。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に属する。
- 6 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- 7 本書の執筆・編集は、(公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 大本朋弥が整理技術嘱託員の補助のもと行った。なお、第4章1節については久保弘幸（(公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部）が分析執筆を行った。
- 8 遺物写真撮影は、国際文化財株式会社に委託して行った。
- 9 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

## 凡 例

1. 遺物には通し番号を付けている。ただし、石器にはその頭にSをつけて土器と区別している。
2. 土器の実測図は、種別ごとに以下のように断面の表現を区別している。  
弥生土器・土師器：白抜き／須恵器：黒塗り／瓦質土器：網掛け（20％）／陶器：網掛け（40％）／磁器：網掛け（60％）
3. 土層等の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』1992版を使用した。

# 本文目次

## 例言

### 第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第3節 原田西遺跡の既往調査	4

### 第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯	6
第2節 本発掘調査の経過	6
第3節 整理事業の経過	8

### 第3章 調査の成果

第1節 概要	9
第2節 第1面の遺構と遺物	12
第3節 第2面の遺構と遺物	16
第4節 第2面下層出土遺物	18

### 第4章 まとめ

第1節 SD01より出土した昆虫遺体	20
第2節 SD01の位置づけ	21
第3節 まとめ	22

# 挿図目次

第1図 原田西遺跡の位置	1	第9図 SD02土層断面	15
第2図 周辺の遺跡 (S=1:35,000)	3	第10図 SD01出土土器	15
第3図 調査区の位置と既往の調査区	5	第11図 第1面出土土器	16
第4図 事業計画と調査区 (S=1:1,500)	6	第12図 調査区平面図 (第2面)	17
第5図 調査区南壁土層断面	10	第13図 第2面出土土器	18
第6図 調査区東壁土層断面	11	第14図 出土石器	19
第7図 調査区平面図 (第1面)	13	第15図 SD01出土昆虫遺体	20
第8図 SD01土層断面	14	第16図 SD01と同時期の溝	23

# 表 目 次

第1表 出土土器観察表……………24 第2表 出土石器・昆虫遺体計測表……………24

## 写真図版目次

### 写真図版1

- 調査区遠景（南上空から）
- 調査区遠景（北東上空から）

### 写真図版2

- A区第1面全景（南から）
- A・C区第1面全景（西から）
- B区第1面全景（南から）

### 写真図版3

- A区南壁土層断面（北西から）
- A区南壁土層断面アップ（北から）
- C区西壁土層断面（北東から）
- C区南壁土層断面（北から）

### 写真図版4

- SD01北アゼ土層断面（南から）
- SD01南アゼ土層断面（南から）
- SD02土層断面（北から）
- 鋤溝土層断面（東から）

### 写真図版5

- A・C区第2面全景（南上空から）
- A区第2面全景（東から）
- B区第2面全景（西から）

### 写真図版6

- 柱状片刃石斧出土状況（北から）
- 柱状片刃石斧出土状況（西から）
- 下層確認トレンチ土層断面（北から）

### 写真図版7

- 盛土除去作業
- 盛土除去作業
- スロープ仮設作業
- SD01掘削作業
- 第1面遺構検出作業
- SD01土層断面作成作業
- 下層確認トレンチ掘削作業
- 中間検査状況

### 写真図版8

- 出土遺物1

### 写真図版9

- 出土遺物2

### 写真図版10

- 出土遺物3



## 第1章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

市域の概要 原田西遺跡は伊丹市岩屋に所在する。伊丹市は兵庫県の南東端に位置しており、人口198,395人（令和元年10月時点）、面積24.97km<sup>2</sup>である。東は大阪府豊中市と境界を接し、北には川西市、南は尼崎市、西は西宮市及び宝塚市と隣接している。市域の西側では武庫川、東側では猪名川がそれぞれ西宮市と豊中市の境界にそって南流し、両河川の沖積作用によって形成された西摂平野が広がっている。猪名川は丹波山地に源を發し、当遺跡の北西約7kmの川西市域南部で平野に入り、平野西部にある伊丹台地の東崖面に沿って向きを南に変え、大阪湾に流入する。

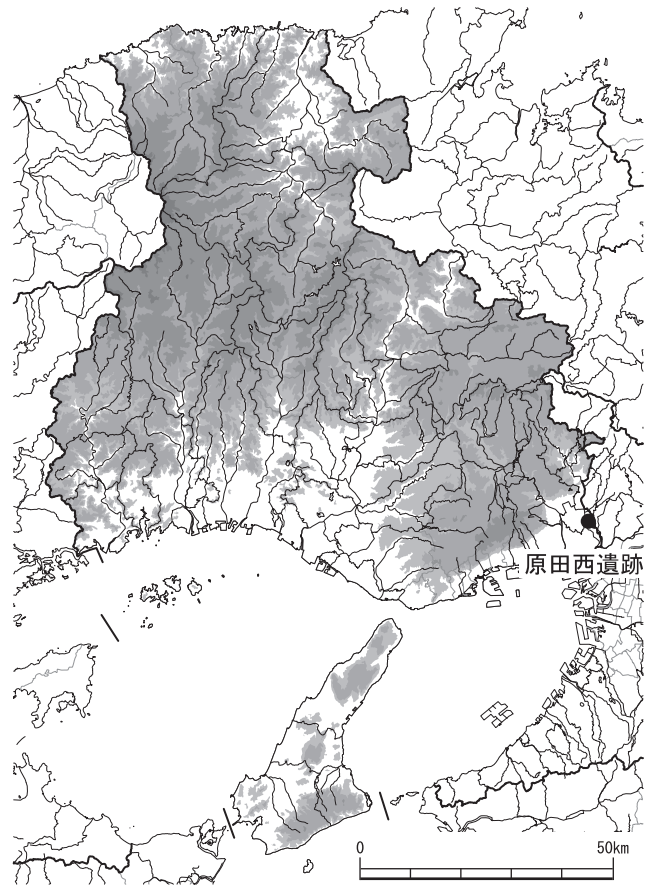
遺跡周辺の地形 原田西遺跡は約400m南を東流する猪名川に接する沖積平野上に立地している。

周辺の地形的環境については、村上泰樹が岩屋遺跡・森本遺跡の発掘調査報告書をまとめるにあたり、旧地形を復元して概略を述べている（村上2006）。

まず、大正3年陸地測量部作製測量図(1/50,000)の読図から、猪名川東岸の北東側にあたる川西市と大阪府池田市域は山地が延び、山地南側の裾野には段丘面が発達していることがわかる。これらの段丘面と猪名川の間発達する沖積平野上には、原田西遺跡・森本遺跡・岩屋遺跡・田能遺跡・口酒井遺跡といった縄文晩期から弥生時代を中心とした遺跡が存在している。そして、旧地形の等高線を復元し、近世以降の集落化により微高地が改変されている点と、猪名川に沿って3本の自然堤防が形成されている点を指摘している。原田西遺跡はこの旧地形復元図からはやや外れているが、中央の自然堤防上にあることが読み取れる。

また、同報告書中では青木哲哉が岩屋遺跡を中心として、より仔細に周辺の微地形分類を行っている（青木2006）。それによると、猪名川現氾濫原と接して比高差30cm～50cm程度の完新世段丘が広がっており、この段丘面上に前述の原田西遺跡をはじめとする縄文晩期～弥生時代にかけての遺跡が集中して分布している。また、完新世段丘には自然堤防・後背湿地・旧河道が分布しており、原田西遺跡は完新世段丘上の自然堤防に立地している。ただし、その東西は猪名川の流路跡である埋没旧河道が入り組み、遺跡を挟むように流れている。

この旧河道は今回の調査区下層においてもシルト層を確認している。



第1図 原田西遺跡の位置

## 第2節 歴史的環境

縄文時代 草創期から前期までの遺跡は非常に少ない。中期から晩期にかけて、土器の出土は認められるものの、遺構検出例は非常に少ない。

中期では本遺跡から船元式土器片が出土しており、当地域において最も古く遡る例のひとつである。大阪空港遺跡A地点（第2図5）では、勝坂式の深鉢把手が出土している。この他、中期末葉の北白川C式土器片が岩屋遺跡（11）、森本遺跡（10）や豊中市勝部遺跡（48）から出土している。

後期には、川西市加茂遺跡で初頭から前葉の柱穴・土坑・埋没土器が検出されている。有岡城跡・伊丹郷町遺跡（7）では土坑から北白川上層式が、小阪田遺跡（2）では自然流路から中津式～元住吉山式にかけての土器が出土している。この他、大阪空港遺跡B地点（6）・穂積遺跡・岩屋遺跡で後期中葉の土器が森本遺跡で滋賀里I式土器が出土している。

晩期には岩屋遺跡で篠原式土器が出土している。晩期後半になると、口酒井遺跡（13）から突帯文土器が大量に出土している。突帯文土器は森本遺跡・岩屋遺跡・豊中市曾根遺跡（54）で出土している。

弥生時代 河内湖沿岸および六甲山南麓では前期初頭に近畿地方で最も早い段階の集落が出現するが、西摂平野では確認されていない。当平野で最も早く出現するのは前期前半の口酒井遺跡であり、溝から密集して土器が出土している。森本遺跡・上ノ島遺跡でも同時期の土器片が出土している。尼崎市東武庫遺跡ではこの時期から中期前半に至るまで方形周溝墓群が営まれ始める。

前期後半になると田能遺跡（14）・原田西遺跡（15）・勝部遺跡（48）では溝や土坑等の遺構が検出されるなど、自然堤防上の微高地に集落が営まれ始めたことが考えられる。同時期の遺跡には藻川川床遺跡（32）・猪名川川床遺跡（21）・栄根遺跡・上ノ島遺跡・栗山庄下川遺跡が確認される。

中期前半になると、田能遺跡・勝部遺跡では集落が拡大し、原田西遺跡や口酒井遺跡でも中期後半まで存続する。また、新たに台地上に立地する集落も出現し、豊中台地上では豊中市蛭池北（宮の前）遺跡（37）や新免遺跡（44）に、伊丹台地上には加茂遺跡で集落が営まれ始める。中期中葉には武庫庄遺跡で大型建物が確認されている。中期中葉から後葉にかけては待兼山遺跡や池田市五月山遺跡などの高地性集落が出現する。また、岩屋遺跡では灌漑施設が検出されている。

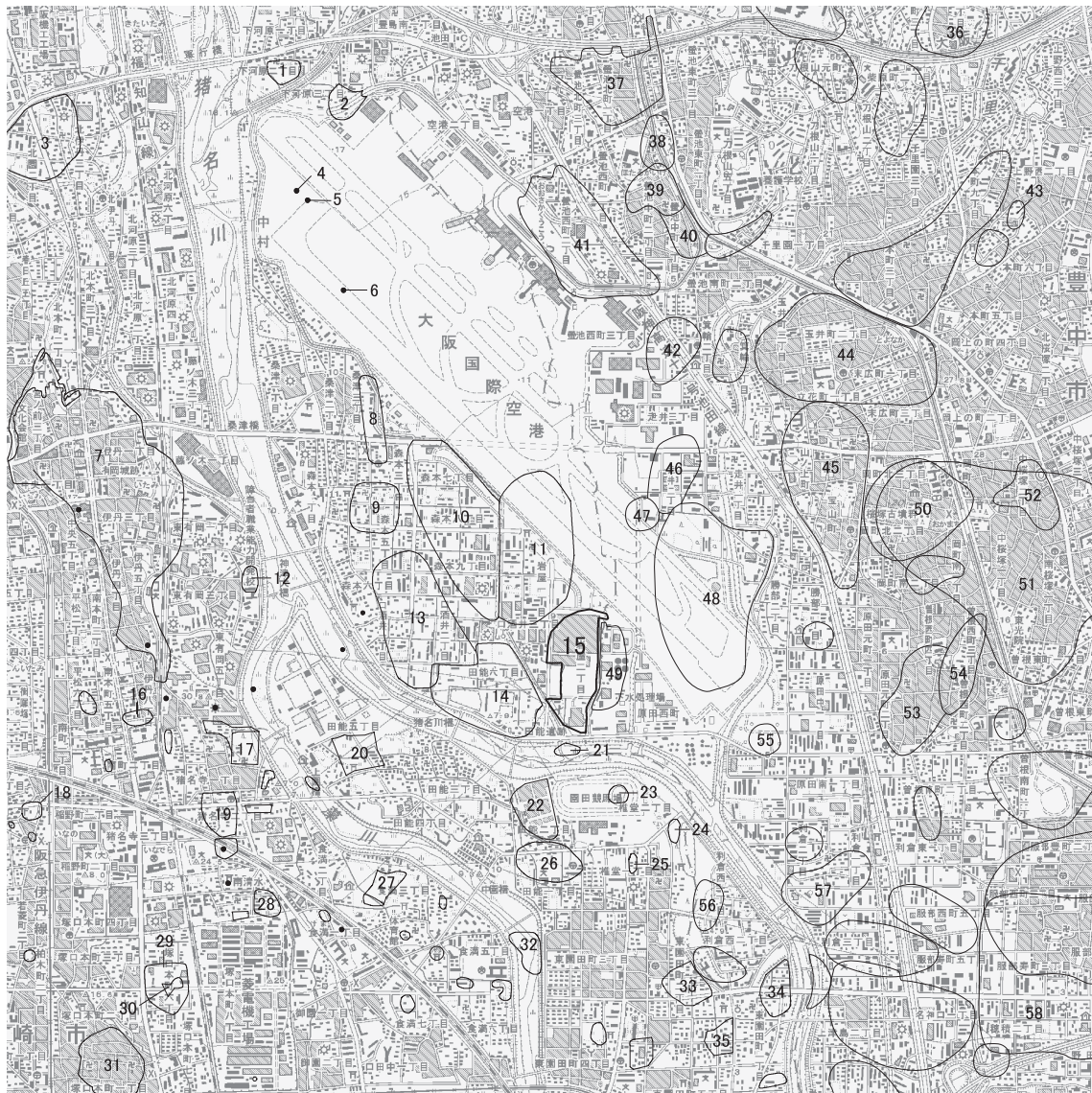
後期では田能遺跡や新免遺跡で集落が存続している。田能遺跡では後期前半が欠如するが、東園田遺跡（33）のほか、岩屋遺跡では中期に引き続き土器が認められる。

古墳時代 集落は拠点集落であった田能遺跡は消滅するが、加茂遺跡・宮ノ前遺跡は弥生時代後期より継続している。勝部遺跡では前期の掘立柱建物・土坑・井戸等が検出されている。

古墳は前期から終末期にかけて築造されている。当初は西摂平野を取り囲む山上に万籟山古墳・長尾山古墳などがつくられるが、前期末になって伊丹台地上にも古墳が築かれるようになる。猪名野古墳群と呼ばれるもので、御願塚古墳（18）・池田山古墳（30）・大塚山古墳・南清水古墳等から成る。池田山古墳は大正時代の土取りによって失われたのち溜池となった前方後円墳だが、兵庫県教育委員会による塚口山廻遺跡（29）の発掘調査で墳丘部分にあたる掘り込み（溜池）と周濠の一部が確認されている。

古代 奈良時代には各地に寺院が建立される。尼崎市には法隆寺式伽藍配置をとる猪名寺廃寺跡（17）、伊丹市では伊丹廃寺跡、芦屋廃寺跡、豊中市には四天王寺式伽藍配置が想定される金寺山廃寺跡（43）がある。集落跡は松ヶ内遺跡（28）・中ノ田遺跡・東武庫遺跡・上ノ島遺跡等がある。この時期、初期荘園の代表例とも





1	下河原遺跡	15	原田西遺跡	30	池田山古墳	44	新免遺跡
2	小阪田遺跡	16	南本町遺跡	31	塚口城跡	45	山ノ上遺跡
3	北園遺跡	17	猪名寺廃寺跡	32	藻川川床遺跡	46	勝部北遺跡
4	中村遺跡	18	御願塚古墳	33	東園田遺跡	47	走井遺跡
5	大阪空港遺跡A地点	19	前畑遺跡	34	東浦遺跡	48	勝部遺跡
6	大阪空港遺跡B地点	20	春日神社遺跡	35	西浦遺跡	49	原田西遺跡
7	有岡城跡 ・伊丹郷町遺跡	21	猪名川川床遺跡	36	内田遺跡	50	岡町北遺跡
		22	田能高田遺跡	37	蛍池北 (宮の前)遺跡	51	桜塚古墳群
8	西桑津遺跡	23	園田競馬場遺跡			52	岡町遺跡
9	森本居館跡	24	椎堂遺跡	38	蛍池東遺跡	53	原田遺跡
10	森本遺跡	25	大西遺跡	39	麻田藩陣屋跡	54	曾根遺跡
11	岩屋遺跡	26	四ノ坪遺跡	40	蛍池遺跡	55	原田中町遺跡
12	松原遺跡	27	喜撰町遺跡	41	蛍池西遺跡	56	椎堂の前遺跡
13	口酒井遺跡	28	松ヶ内遺跡	42	箕輪遺跡	57	利倉遺跡
14	田能遺跡	29	塚口山廻遺跡	43	金寺山廃寺跡	58	穂積村困堤

第2図 周辺の遺跡 (S=1 : 35,000)

## 第1章 遺跡の位置と環境

なった東大寺領猪名庄遺跡は大型掘立柱建物跡が検出され、荘所が確認された。猪名庄を最古として、橘御園・潮江荘・長洲荘等ほぼ市域全域に広がっている。平安時代にかけても遺跡は継続するが、長洲荘の力が強いことから長洲浜に遺跡が多い。

調査地周辺（猪名川左岸）は昭和50年代まで都市化が進んでおらず、農耕地が多く残っていたため地形図には条里遺構が顕著に残っており（第3図）、川辺南条の一条二里に当たると考えられる。本調査区の北北西には九の坪、その北側には三の坪の字名が残っており、東西方向の地割であるが、水路を挟んで地割が南北方向になっていることがわかる。このことから、本調査区の西側をかつて流れていた水路は条里の坪境であった可能性が考えられる。

中世以降 荘園遺跡は継続するとともに、遺跡数はなお増加する。なかでも大物遺跡は古代末から近世にかけての港湾遺跡を代表するものであり、搬入土器の多さから各地との交流が見て取れる。中世城館として富松城跡が早くに築城され、続いて塚口城跡（31）・有岡城跡・伊丹郷町遺跡が築かれる。

## 第3節 原田西遺跡の既往調査

原田西遺跡では、これまで昭和51年度～56・58年度にかけてと平成15年度の8次にわたって本発掘調査が実施されている（第3図）。調査の結果、弥生時代前期以降の各時期において様々な遺構・遺物が見つかった。

弥生時代 前期より遺構が営まれ、中期には東地区と南地区において2つの方形周溝墓群が形成される。東地区では10基の方形周溝墓が並んで検出され、うち5基からは木棺が検出され、棺材が残存しているものも確認された。周溝内からは供献土器が比較的良好な状態でみつかった。

また、弥生時代を通じて古猪名川とその支流と思われる旧流路が、流れを変えながら北から南へと流れており、それを利用した後期の水利施設が見つかった。中期には東側域で多数の杭列を伴った堰遺構群が検出されており、護岸施設・分水堰・越流堰などの性格が想定されている。西側域でも人工水路と考えられる溝が7条見つかった。灌漑利用が行われていることがわかる。

古墳時代 古墳時代の遺構の分布は希薄で遺物量も少ないが、土坑や溝内からややまとまった量の初期須恵器が出土している点には注意が必要である。流路も弥生時代の溝から中期の溝が分岐する形で検出されており、長期間にわたって流れが繰り返されていたことがわかる。

古代 律令期以降の遺構は東地区で平安前期頃の掘立柱建物跡が見つかった。また、詳細な時期は不明だが、南地区においても中世以前に遡る掘立柱建物群が見つかった。

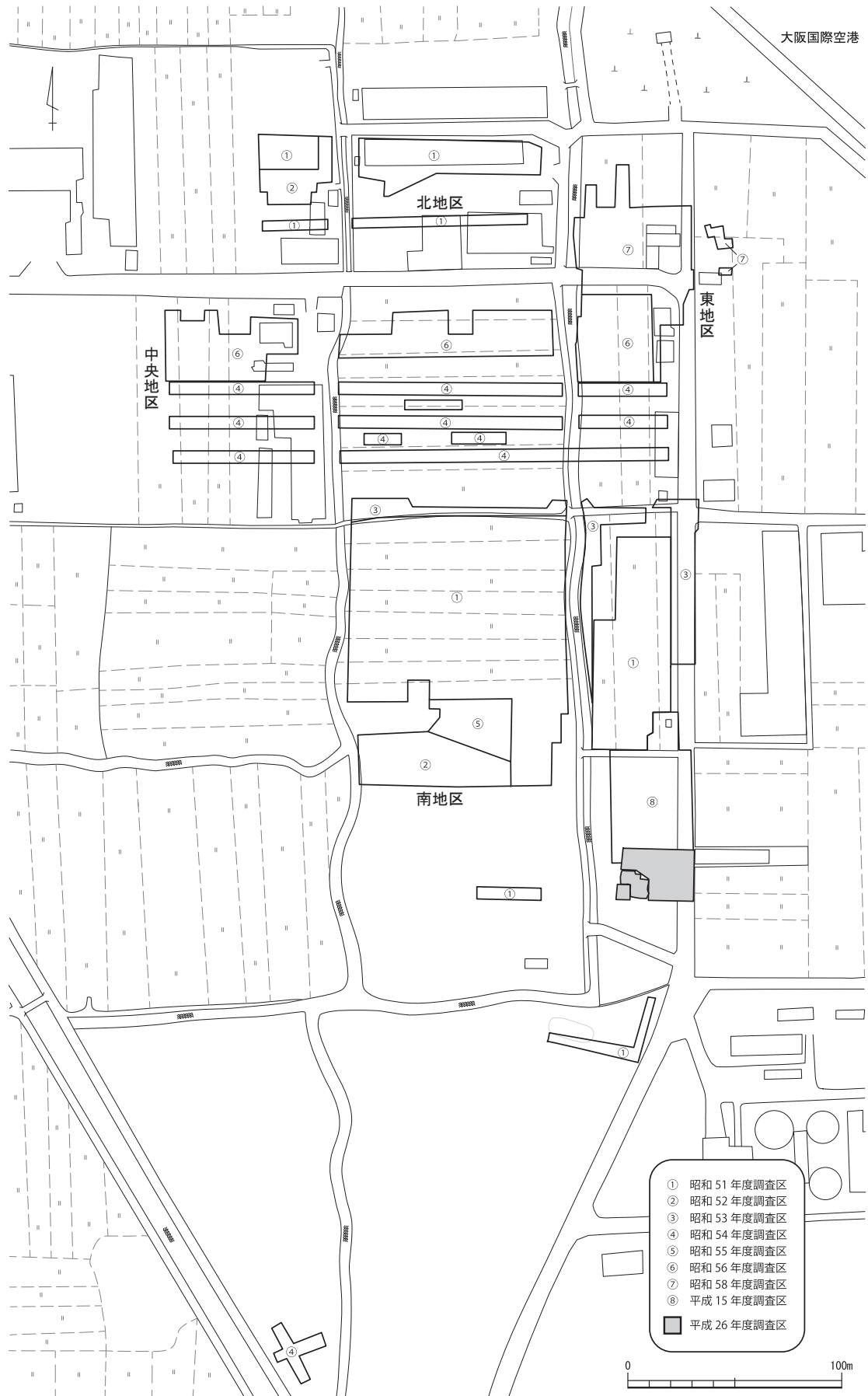
中世 東地区と中央地区・南地区にかけて4条の溝が検出されている。これらの溝はすべて断面がV字形を呈し、埋土の状況についても共通している。水口や河川からの引き込み口が見られず、埋土の堆積状況から流水の痕跡が認められないことや頭骨が発見されていることから、防御施設の可能性が考えられているが、この溝以外にそれらしき痕跡が全く見つからないことから性格は不明である。

### <参考文献>

村上泰樹 2006「第2章第1節 地理的環境」『岩屋遺跡・森本遺跡』兵庫県教育委員会

青木哲哉 2006「第6章第12節 岩屋遺跡とその周辺の地形環境」『森本遺跡・岩屋遺跡』兵庫県教育委員会

小川良太・岡田章一ほか 2009『原田西遺跡』兵庫県教育委員会



第3図 調査区の位置と既往の調査区



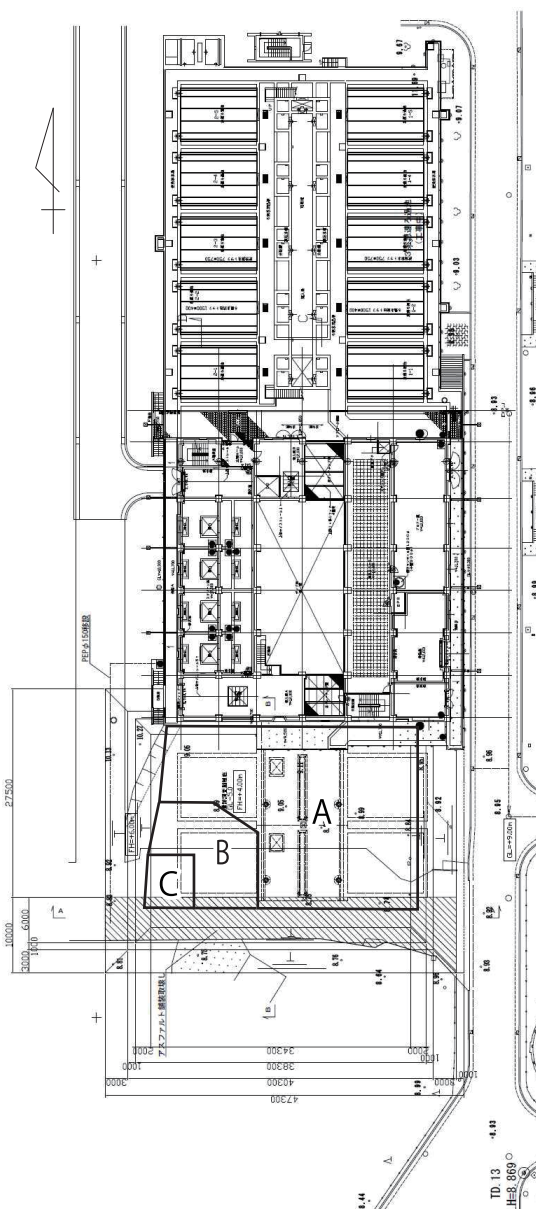
## 第2章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

猪名川流域下水道原田処理場は伊丹市岩屋、尼崎市田能、大阪府豊中市原田西町の3市にまたがる施設で、兵庫県4市1町（伊丹市・尼崎市・川西市・宝塚市・猪名川町）と大阪府3市1町（豊中市・池田市・箕面市・豊能町）の下水を処理している。原田処理場の下水処理施設は、微生物の働きを利用した標準活性汚泥法による標準的処理を行う1系・2系と、高度処理を行う3系がある。3系処理施設では微生物と凝集剤を併用することで窒素とリンを除去し、高度処理された水の浮遊物質を砂層でろ過して猪名川に放流している。この施設について、兵庫県阪神南県民センター西宮土木事務所は、急速ろ過池増設を計画している（第4図）。

事業対象地は原田西遺跡（遺跡番号080082）の範囲に該当しており、昭和51（1976）年度から昭和58（1983）年度および平成15（2003）年度の8次にわたって兵庫県教育委員会が発掘調査を実施してきた（第3図）。中でも平成15年度調査区は今回の調査範囲の北隣に当たり、弥生時代～古墳時代と中近世の2時期にわたる遺構面が確認され、条里地割に沿った南北方向の大溝も検出されている。今回の事業地は大溝の南側延長線上にあたることから、遺跡が連続していることは明らかであった。

したがって、事業対象地について本発掘調査を実施する必要があると判断された。



第4図 事業計画と調査区 (S=1 : 1,500)

### 第2節 本発掘調査の経過

#### 1. はじめに

原田西遺跡の埋蔵文化財本発掘調査については、調査対象範囲となる794㎡について阪神南県民局長（西宮土木事務所）からの依頼（平成26年3月19日付神南（西土）第2690号）を受けた兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会より委託を受けた（公財）兵庫県まちづくり技術センターが本発掘調査を実施す

ることとなった。

調査範囲は処理場の建設時に非常に厚く盛土がされており、遺構面は地表下約4mに存在していることが当時の記録から明らかであった。このため、盛土および旧耕土・床土については(公財)兵庫県まちづくり技術センターの調査担当者立会いのもと、事業者によって掘削・除去作業が進められることとなった。

盛土掘削・除去工事の開始後、調査区の南西において大規模な埋設コンクリート基礎が見つかったが、基礎下面は遺構面よりも上にあり、遺構面が攪乱を受けていないことが確認できた。このため、基礎下面についても調査が必要であると判断されたが、あまりにも巨大であったため調査中に除去することは不可能であった。このため事業者と考古博物館埋蔵文化財課による協議の結果、当該基礎部分を調査区から除外した684㎡(第4図A・C)について(公財)兵庫県まちづくり技術センターが本発掘調査を行い、基礎部分(同図B)については本体工事で基礎を除去した後、兵庫県立考古博物館埋蔵文化財課が本発掘調査を実施することとなった。調査の体制と概要については以下の通りである。

## 2. (公財)兵庫県まちづくり技術センターによる調査

遺跡調査番号 2014004

調査期間 平成26年6月2日～平成26年7月25日

調査面積 684㎡

調査担当 (公財)兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

調査第2課 岸本一宏・大本朋弥

調査の概要 事業者による5日間の盛土除去工事が完了した後、コンクリート基礎を除く範囲(A区・C区)を発掘調査した。遺構面は2面あり、出土遺物からいずれも中世に位置づけられる。第1面からは条里に伴うと思われる南北方向の大溝及び小溝を各1条と、東西方向の鋤溝を多数検出した。第2面では水田などの遺構を検出するとともに、上面で検出した大溝下層を調査した。

検出・掘削した遺構については、第1・2面ともに高所作業車による写真撮影及び有人ヘリコプターによる空中写真測量を実施した。以上の調査が終了した後、東西方向にハの字状に22mと25mの下層確認トレンチを設定した。約1.8m掘り下げたところ、ほぼ全面に渡って弥生時代以降に形成されたと思われる湿地性の堆積を確認した。

## 3. 兵庫県立考古博物館による調査

遺跡調査番号 2014099

調査期間 平成26年11月4日～平成26年11月6日・11月11日

調査面積 110㎡

調査担当 兵庫県立考古博物館 総務部埋蔵文化財課 池田征弘

調査の概要 本体工事でコンクリート基礎が撤去されたのち、当該範囲(B区)を直接執行により発掘調査した。コンクリート基礎下には直径30cm程度のコンクリート柱が多数打ち込まれており、その施工時の影響によるものと考えられる土壌の変色が見られた。このため、A・C区に比べ遺構の残存状況は良くなかったものの、第1面ではA・C区と同様に東西方向の鋤溝、第2面ではA区より連続する水田の段差を検出している。これらの遺構については平板測量により平面図を作成した。

### 第3節 整理事業の経過

#### 1. はじめに

出土品整理作業は令和元年度（平成31年度）の1ヶ年で実施した。作業内容及び体制は以下のとおりである。

#### 2. 作業内容と体制

**作業の概要** 土器・木器の水洗い、ネーミング作業、接合・補強、実測、写真撮影・写真整理、遺物のトレース、遺構図の図面補正・トレースを行った。そして、これらの図面をレイアウトした後、原稿執筆・編集作業を行った。

なお、今回の調査では後述する昆虫遺体（コアオハナムグリの左上翅）が出土しており、水漬保管していたが、写真撮影後に乾燥による変形が一部で認められた。このため、表面コート剤（商品名：ナチュラルコート）を使用して保存処理を実施した。

**整理体制** （公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課 深江英憲・大本朋弥

調査第1課 岸本一宏

嘱託員 A作業：荻野麻衣・小野潤子・森松沙耶香・菅生真理子・石原香苗・小林礼子・  
岡崎眞子

B作業：尾鷲都美子・佐伯純子

## 第3章 調査の成果

### 第1節 概要

#### 1. 調査の概要

前章で触れたとおり、本発掘調査区はコンクリート基礎部分を避けるためA・C区とB区の3地区に分割して2度の発掘調査を実施した。ただし、これらの調査区は遺構面及び検出遺構ともに連続しているため、ここでは便宜的に一つの調査区としてまとめて報告する。

調査区は盛土掘削の底面を上端とし、南北24m、東西は北側で33m、南側で36mの台形状を呈する。調査区北部では既存の施設より約8mに渡って深く大規模な攪乱があり、大溝も検出面からの深さ約1.4mまで破壊されていた。しかし、調査後の整理作業の結果、この箇所については平成15年度調査と重複しており、既に調査が終了していることが判明した。

現地表は下水処理場建設時の盛土が厚く、標高8.6m～8.9mであったが、遺構検出面は標高4.7m～4.8mである。調査の結果、上下2面で遺構面が確認され、第1面からは南北方向の溝2条と東西方向の鋤溝多数が検出された。第1面よりも10cm程度掘り下げた第2面では、第1面で確認した中世の南北方向の溝の下層を調査し、その東西において水田を検出した。

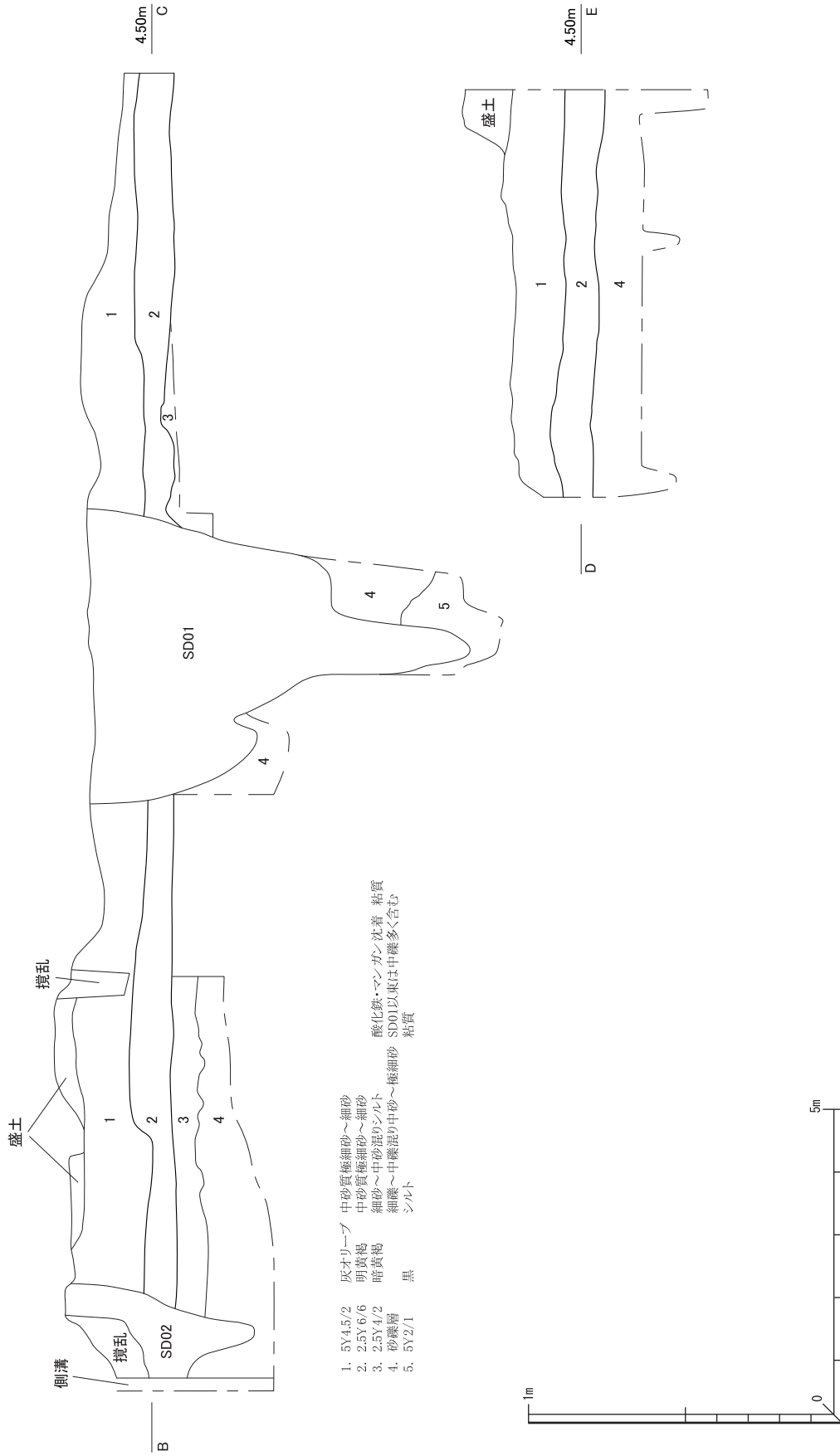
#### 2. 基本層序と遺構の検出

調査区の土層は、約4mの厚さの盛土層の下層に5Y4.5/2灰オリーブ中砂質極細砂～細砂層（第5図第1層）が厚さ約20cmで堆積している。この層が少量の土器片を含む遺物包含層となっており、下層の2.5Y6/6明黄褐色中砂質極細砂～細砂層（第5図第2層、第6図第1層）上面が第1面の遺構面となっている。

第1面は調査区全体で標高4.5m前後でほぼ水平に堆積していた。遺構検出したところ、東西方向の小規模な溝が無数に存在しており、鋤溝であると考えられた。この小溝は掘方の最下層全体に白色の極細砂が薄く堆積しており、明瞭に輪郭を確認することができた。また、調査区中央東寄りで上端幅約4.5mの南北方向の大規模な溝（SD01）1条と、調査区東端で上端幅2m以上の南北方向の溝（SD02）1条を検出した。

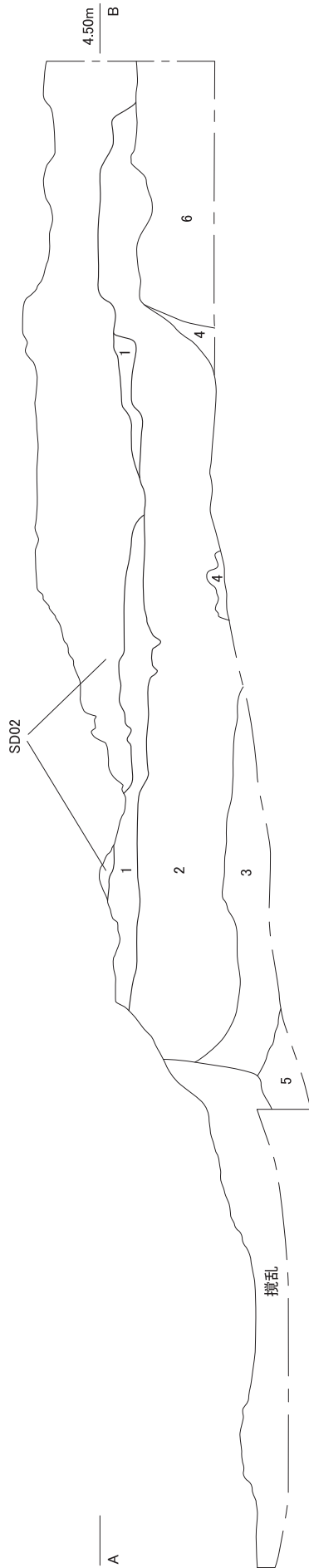
その下層には2.5Y4/2暗灰黄細砂～中砂混じりシルト層（第5図第3層）と同シルト層（第6図第2層）が堆積しており、その上面が第2面となっている。第2面は東西方向はほぼ水平であるが、南北方向については北側で一段低くなっており、この段差が水田の区画となっていることを確認した。

この段差は基盤層である砂礫層（第5図第4層、第6図第6層）の落ち込みと対応している事がわかる。落ち込みには2.5Y3/1～5Y2/1黒褐シルト層（第6図第3～5層）が堆積している。これらのシルト層は下層確認トレンチでも厚さ1.6mに渡る堆積を確認している。このことから、本発掘調査区は東西方向に幅15m以上の旧流路が流れており、これが埋積して湿地化したことが考えられる。したがって、第2面で検出した水田跡は、このような湿地堆積物を利用して形成されたものと考えられる。

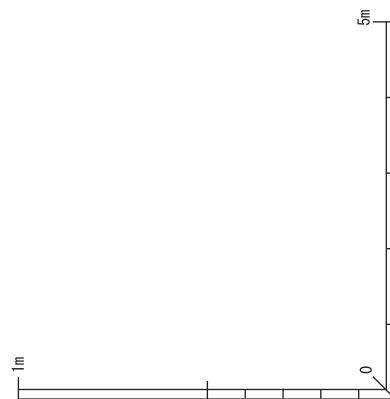


第5図 調査区南壁土層断面





- 1. 2.5Y 6/6 明黄褐 極細砂～細砂 中砂少量含む、マンガン含む 上面が第1面
- 2. 2.5Y 4/2 暗灰黄 シルト 細砂～中砂微量含む、4層との境に中砂～粗砂のフミナ 上面が第2面
- 3. 2.5Y 3/2 黒褐 シルト 粗砂～細砂のフミナ含む 褐鉄含む、粘質
- 4. 2.5Y 3/1 黒褐 シルト 褐鉄含む、粘質
- 5. 5Y 2/1 黒 シルト 粘質
- 6. 砂礫層 中砂～極細砂 細礫、中礫少量含む、褐鉄含む



第6図 調査区東壁土層断面

## 第2節 第1面の遺構と遺物

### 1. 概要

第1面では、既往の調査で見つかった南北方向の大溝（SD01）と、調査区東端で溝（SD02）を1条検出した。また、調査区全面にわたって東西方向に非常に多数の小溝（鋤溝）を検出している。出土遺物は僅少であり、細片が多い。包含層出土遺物から、中世後期～近世に位置づけられる。

### 2. 遺構

#### SD01（第7図・第8図 写真図版4）

**概要** 調査区中央部東寄りで見出した大溝である。第1面で検出しているが、埋土の観察から第2面と同時期かそれ以前まで開削は遡る可能性がある。一連の溝は隣接する平成15年度調査区と、それ以北の連続する既往調査区においても見つかったことから、条里に伴う大溝と考えられる。

ここでは、第2面に伴う下層も含めて一括で触れることとする。

**形状・規模** 南北に一直線に伸びており、本調査区では北側の攪乱を除く21mの範囲で検出している。上端幅は4.0m～5.0m、検出面からの深さ1.4mである。断面形状は西肩部では緩やかに一段下がって幅1m前後の平坦面となっている部分があるものの、全体的になだらかなV字形に近い。ただし、底は幅50cm前後の箱形となっている。

**堆積状況** 埋土は大きく3つに分かれる。上層（第1層）は中礫・大礫混じりのシルト質極細砂で、グライ化している。粘性はあるものの、やや粉っぽい。17世紀の播鉢片（第10図5）が出土しており、近世以降に埋め戻された際の埋土と考えられる。

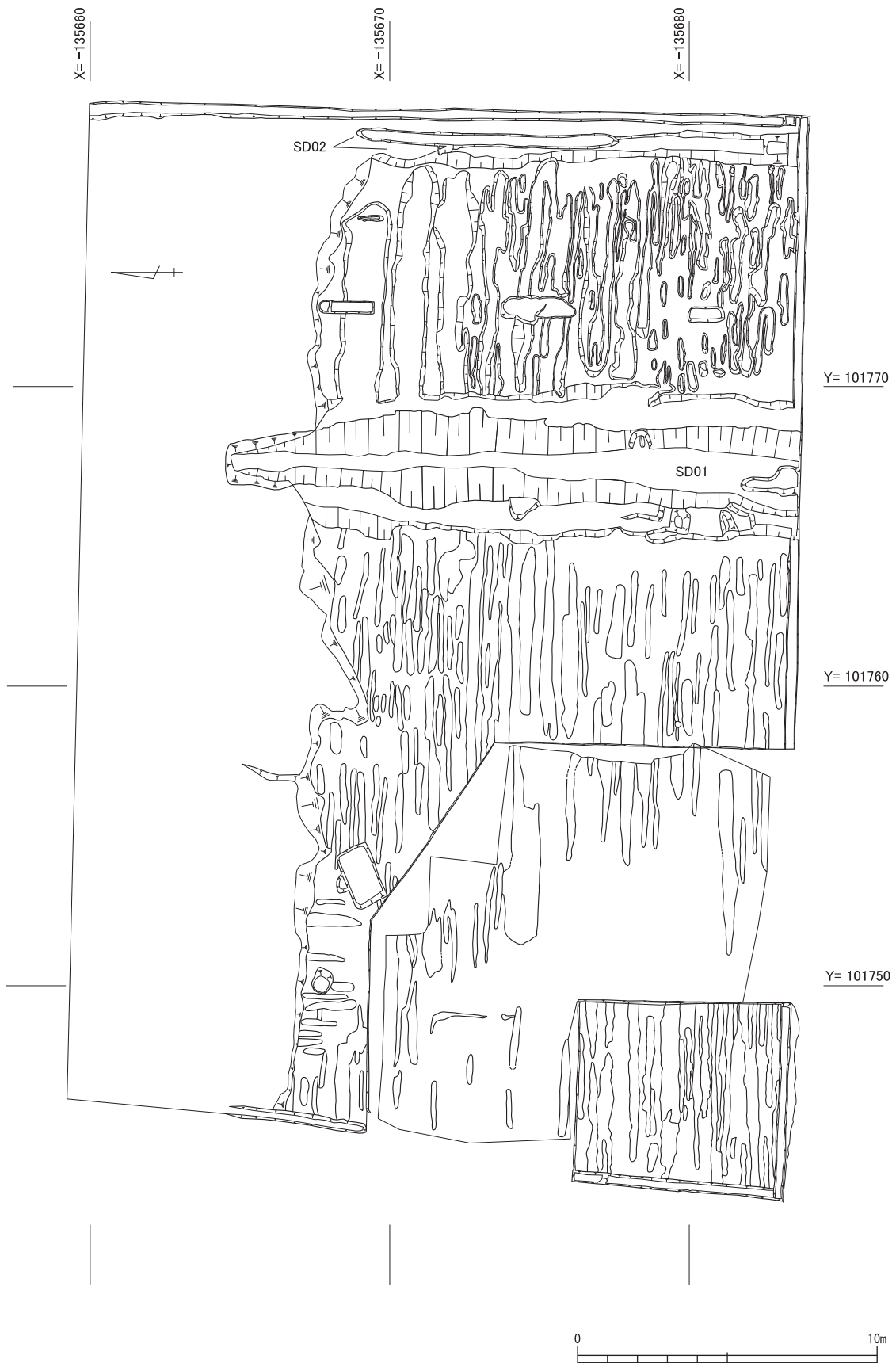
中層は2.5Y2/1黒色～10Y4.5/1灰色の極細粒砂～シルト（第5層～第10層）である。中層最下部に薄く堆積する第10層にはラミナが数条認められ、北から南へ一定量の水流があったことがうかがえる。ただし、第5層・第8層には多量のブロックが含まれていることから、ある段階で人為的に埋め立てられている。第1面（第18層上面）を覆う土層の上から埋まっており、鋤溝（第3層）を伴う水田土壌（第2層）が上層に堆積している。出土遺物は弥生土器（第10図1）や古代の須恵器（同図4）に混じって丹波焼や瓦器碗の小片が見られる。

下層は2.5Y2/1黒～10Y3.6/1灰色の極細砂～細砂が混じるシルト層（第11層～第17層）である。最下層の第16層・第17層は基盤層（第22層）のブロックを多く含んでおり、第17層からは広葉樹の植物遺体も出土している。このブロックは流水量が多いため基盤層が掘りこまれ、それにより堆積したと考えるべきであろう。最下層埋没後も流路はその機能を維持しており、第14層・第15層では多数のラミナが観察される。

なお、上述した大溝西側肩部の段差について、土層を観察すると溝肩より深さ70cmの部分（第18層～第21層）で、約20cm下方にすべった状況を示していた。これは、地震等で肩が崩れたためと思われる。

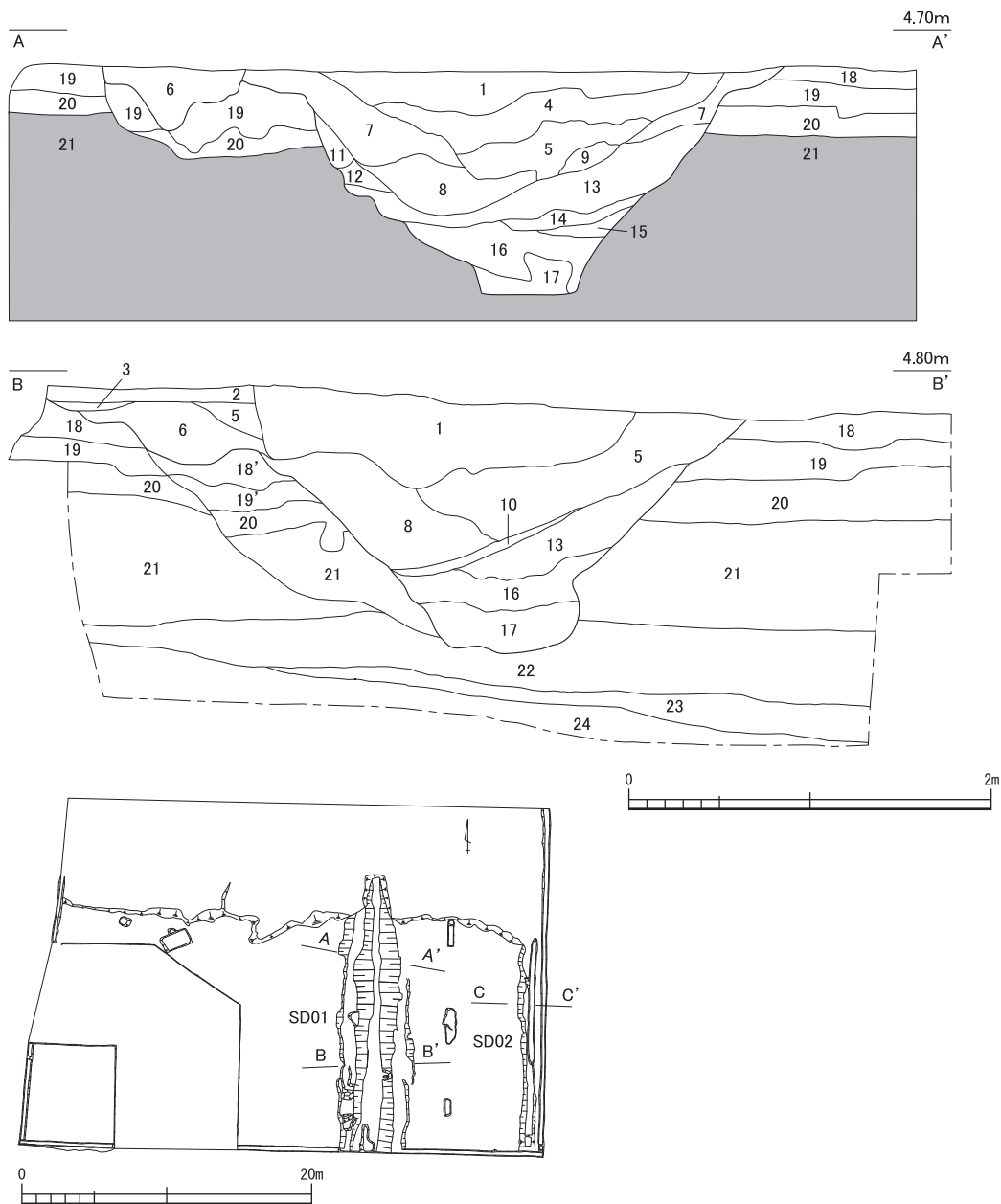
遺物は多くないが、弥生土器（第10図3）に混じって青白磁蓋（同図6）が出土していることから、中世前期頃まで機能していたものと思われる。

なお、下層埋土からは昆虫左上翅が1点出土しており、同定の結果コアオハナムグリであることがわかった。その生態から地層の堆積は本種が最も個体数を増す晩夏以降の時期であった可能性が示唆されている。また、埋没速度についても昆虫が分解されない程度の短期間であったことが指摘される。



第7図 調査区平面図(第1面)

第3章 調査の成果



- |     |            |       |  |
|-----|------------|-------|--|
| 1.  | 5GY 4.6/1  | オリーブ灰 | シルト質極細砂 φ2~8cmの中礫、大礫を2%含む やや粘質だが粉っぽい                     |
| 2.  | 5Y 4.5/2   | 灰オリーブ | 極細砂~細砂 中砂少量含む (水田土壌)                                     |
| 3.  | 5Y 4/3     | 暗オリーブ | 極細砂~細砂 (鋤溝埋土)  |
| 4.  | 10Y 4.5/1  | 灰     | 細砂質極細砂 ブロック40%程度含む やや粘質                                  |
| 5.  | 10Y 4.5/1  | 灰     | 細砂質極細砂 1~10cm程度の緑灰色粘土ブロック7%含む 東半は酸化して5Y5/4 オリーブを呈する やや粘質 |
| 6.  | 10YR 3/1   | 黒褐    | 細砂質極細砂 下半に7.5Y5/1 灰シルト質極細砂~細砂含む 粘質                       |
| 7.  | 2.5Y 4/1.7 | 暗灰黄   | 細砂~中砂混りシルト~極細砂 8層の酸化部分                                   |
| 8.  | 2.5Y 2/1   | 黒     | 細砂~中砂混りシルト~極細砂 21・22層のブロック70%程度含む 粘質                     |
| 9.  | 2.5GY 2/1  | 黒     | シルト~極細砂 21層のブロック含む 粘質                                    |
| 10. | 5Y 6/2     | 灰オリーブ | 極細砂~細砂 厚さ5mm程度のラミナが数条あり                                  |
| 11. | 2.5Y 3.6/2 | 暗灰黄   | 中砂質シルト~極細砂 やや粘質  |
| 12. | 10Y 4.5/1  | 灰     | シルト~極細砂 細砂微量含む 粘質  |
| 13. | 2.5Y 2/1   | 黒     | 細砂混りシルト~極細砂 ブロック30%含む 粘質                                 |
| 14. | 2.5Y 2/1   | 黒     | 細砂混りシルト~極細砂 ラミナ多い 粘質                                     |
| 15. | 2.5Y 2/1   | 黒     | 細砂混りシルト~極細砂 ラミナ多い 粘質                                     |
| 16. | 2.5Y 2/1   | 黒     | 細砂混りシルト~極細砂 ブロック90%含む 粘質                                 |
| 17. | 10Y 3.6/1  | 灰     | 極細砂~細砂混りシルト 下半は22層のブロック(植物遺体含む)あり 粘質                     |
| 18. | 5Y 5/1     | 灰     | 中砂~細礫混り極細砂~細砂  |
| 18' | 7.5GY 5/1  | 緑灰    | 極細砂~細砂 (18層の還元層)   |
| 19. | 2.5Y 6/6   | 明黄褐   | 中砂混り極細砂~細砂 粘質 (上面が第1面)                                   |
| 19' | 10Y 4.5/1  | 灰     | 極細砂~細砂 やや粘質 (19層の還元層)                                    |
| 20. | 2.5Y 4/2   | 暗灰黄   | 極細砂~中砂混りシルト 褐鉄・マンガン含む 粘質                                 |
| 21. | 5Y 2/1     | 黒     | シルト 色調が上方は薄く、下方は濃い 粘質                                    |
| 22. | 2.5Y 2/1   | 黒     | シルト 植物遺存体含む(5GY 4/1 暗オリーブ 灰 粗砂がラミナ状に互層で含まれる)             |
| 23. | 砂礫層        |       | 細砂~φ3cmの中礫 淘汰悪い  |
| 24. | 7.5Y 2/1   | 黒     | シルト (10Y 4/1 灰 細砂~粗砂が0.5~2cmの厚みでラミナ状に互層で堆積)              |

第8図 SD01土層断面

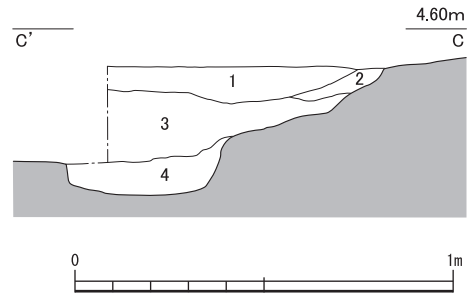
SD02 (第9図、写真図版4)

概要 調査区東端で検出したが、東半部は調査区外であった。SD01と同じく南北方向に直線的に流れる溝で、溝の西半分から中央付近まで検出できた。

形状・規模 横断面は緩やかな弧状を呈し、検出面からの深さは約35cmである。底付近はSD01同様に箱形に掘り窪まっている。このような落ち込みは流水によって溝中央付近に形成されることから、溝の上端幅は1.6m～2.0m程度に復元できよう。

堆積状況 溝内の埋土は褐鉄やマンガンの沈着したシルト～極細砂層がグライ化していた。これらは盛土前の水田土壌と考えられ、近現代まで使用された水路である可能性が高い。

埋土からは中世の土師器や古墳時代の須恵器が出土しているが、細片のため図化していない。



1. 10G5.5/1	緑灰	シルト～極細砂	細砂含む	褐鉄・マンガン含む	やや粘質
2. 7.5Y4.5/1	灰	シルト～細砂		褐鉄・マンガン含む	
3. 5GY5/1	オリーブ灰	細砂質シルト～極細砂		褐鉄・マンガン含む	粘質
4. 2.5GY5/1	オリーブ灰	シルト質極細砂		褐鉄・マンガン含む	やや粘質

第9図 SD02土層断面

鋤溝 (写真図版4)

第1面では、全面に渡って幅が15cm程度から約120cm、深さが3cm程度から10数cmの小溝跡を多数検出し、水田や畑の耕作に伴う鋤溝であると判断できた。このため、大部分は遺構上端ラインの検出にとどめ、一部を掘削して平面及び断面掘形を確認した。その結果、幅15～25cm、深さ3～7cm程度を単位とした溝を基本とし、幅が広いものや深いものについては、数本の鋤溝が平面的・立体的に重複しているのを確認した。

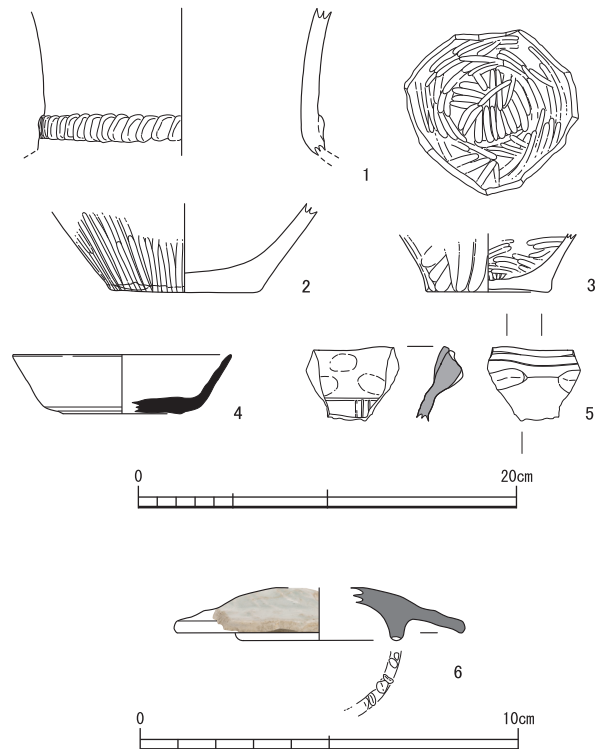
3. 遺物

SD01出土遺物 (第10図、写真図版10)

1は弥生時代中期後半の壺頸部片で、肩部にかけての屈曲部で割れている。頸部下半には反時計回りに指頭圧痕突帯が施されている。ナデ調整で仕上げられているが、内外面とも摩滅している。2は弥生時代中期の壺底部である。内面あるいは外面を丁寧にミガキ調整で仕上げている。3は弥生時代中期の甕底部である。これらは上層下層問わず出土しており、SD01に伴うものと判断することはできない。

4は8世紀中頃の須恵器杯Aである。底部を回転ヘラ切りしたのちナデによって仕上げられ、口縁部まで直線的に立ち上がる。径高指数は27。

5は17世紀の播鉢口縁部片である。口縁部外面は断面三角形に肥厚しており、片口状にひらく。焼成は不良で土師質に近い。器壁は薄く、播目も櫛引きで3条



第10図 SD01出土土器



以上施されているが非常に浅い。

6は青白磁の蓋である。口径が7.6cm、かえり部径が4.0cmで、小壺に伴うものと思われる。かえりの端部には工具先端による2個1単位の刻みを0.7cm間隔で施す。外面には青白釉を施釉するが、内面は露胎である。型押しによる陽刻で文様が描かれるが意匠は判然としない。景德鎮窯産と考えられ、13世紀前半の所産である。

#### 包含層出土遺物（第11図、写真図版8）

第1面上層の遺物包含層からは弥生時代～中世の土器が出土しているが、小片で摩滅を受けているものが多い。このため、古代以前のもの大半は耕作等によって巻き上げられたものと考えられる。

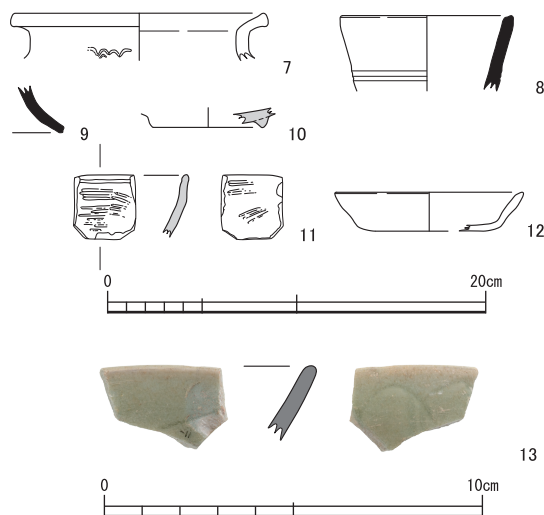
7は弥生時代中期後半の甕口縁部片で、頸部には櫛描きで波状文が施文される。内外面ともナデ調整で仕上げられる。

8は須恵器の平瓶口縁部片で、内外面とも回転ナデ調整で仕上げられる。頸部下半には沈線が2条施される。6世紀後半の所産である。9は高坏脚部片であるが、歪みが大きく径は不明である。6世紀のものか。

10は畿内系Ⅲ類の内黒の黒色土器底部片である。断面三角形の貼付け高台が付されるが、貼付部のナデ調整が

不十分で、痕跡が明瞭に残る。10世紀。11は樟葉型瓦器碗の口縁部片である。口縁内面には端部直下に沈線状のミガキが施され、下半まで比較的密に磨かれているが、外面はかなり省略されている。12世紀後半。

12は土師器皿である。13は青磁碗の口縁部片である。口縁端部は丸くおさめ、外面には連弁文が描かれる。14世紀後半～15世紀前半に位置づけられる。



第11図 第1面出土土器

### 第3節 第2面の遺構と遺物

#### 1. 概要

第1面より10cm～20cm下層にある第2面では、水田跡を検出した。水田は旧地形の段差を生かして区画されており、少なくとも5面ある。

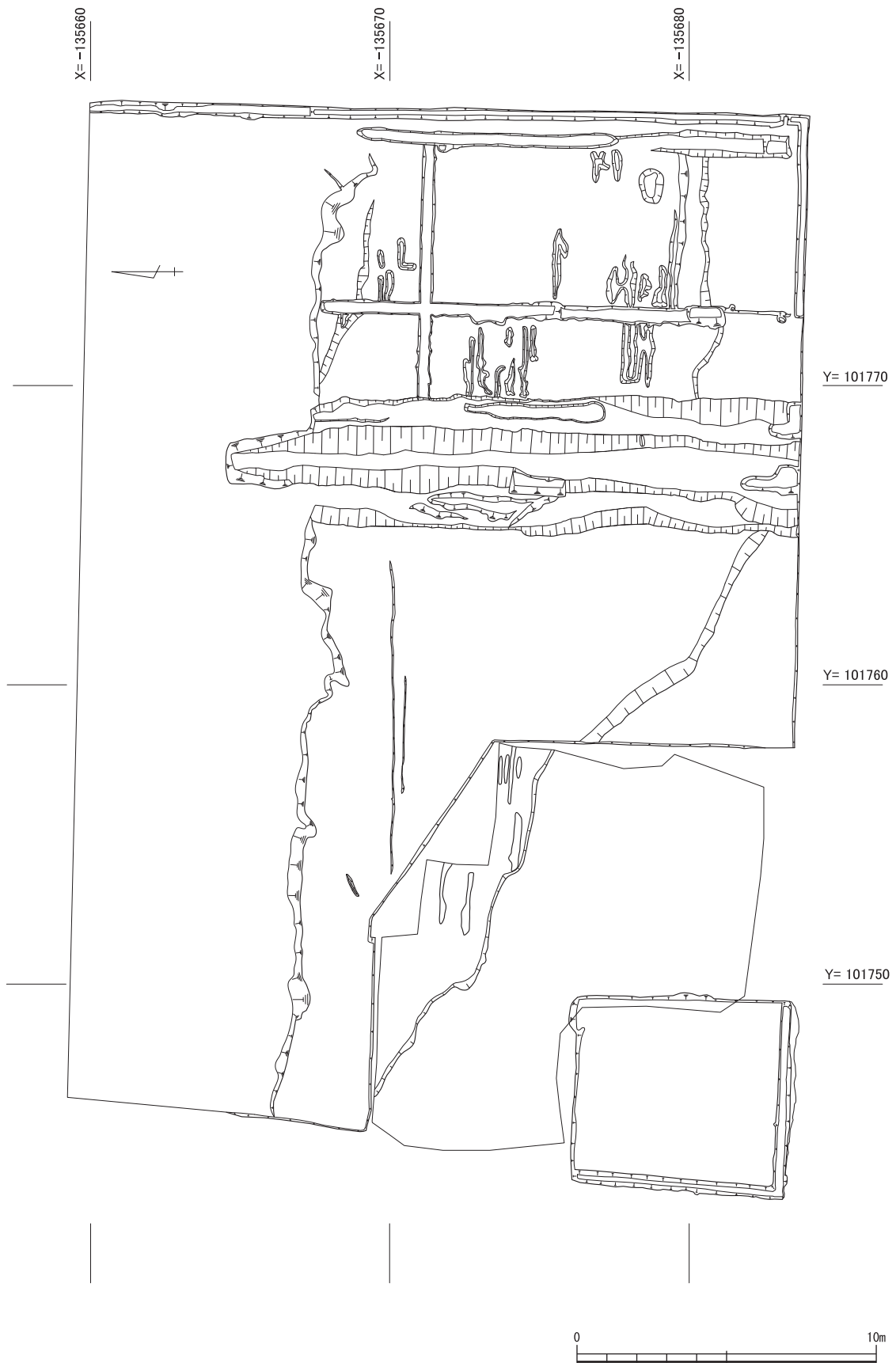
水田跡上面の包含層からは中世前半の遺物が出土しており、水田跡とSD01下層部分が時期的に対応する。水田面から溝底までは約1mの深さである。

#### 2. 遺構

##### 水田跡（第12図）

水田跡はSD01を挟んで東西合わせて5～6面を数える。畦畔は検出できなかったが、水田区画はわずかな段差として認識できる。水田土壌は暗灰黄色の粘質土であるが、足跡等の痕跡は見つけられなかった。

SD01の東側では中央部分が北及び南部分よりも約5～10cm低くなっていることから（第6図）、ほぼ東西



第12図 調査区平面図(第2面)

方向に近い区画が3面認められる。

一方、SD01の西側ではN55° Wに区画の方向を変えて25m以上に渡って段差が続く。これは、下層確認トレンチでも観察された東西方向と推定される旧河道の埋土をそのまま水田土壌として利用したためと考えられる。北側については攪乱によって現状では2面しか確認できないが、SD01東側と同じく北側にも高まりが続き、3面はあったものと思われる

### 3. 遺物

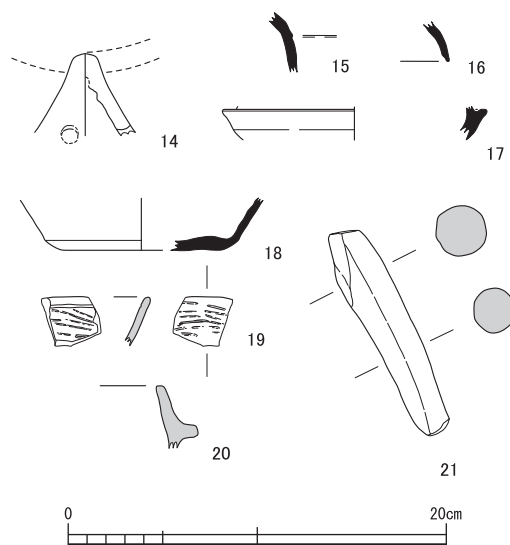
#### 包含層出土遺物（第13図、写真図版9）

古墳時代～中世前半の土器が出土している。全体に磨滅を受けており、小片である。

14は土師器の高坏である。杯部との接合部で剥離しており、脚柱部のみが残存している。径約1cmの円形透かし穴が3か所に施されるが、全形は明らかでない。15・16はTK10型式の杯蓋口縁部である。

17はMT85～TK43型式の須恵器杯身である。体部は直線的で、口縁端部は割れている。18は底部から口縁部にかけては直線的に立ち上がる杯Aの底部である。底部外面はヘラ切りのちナデ調整で仕上げられる。8世紀後半。

19は樟葉型瓦器碗口縁部片である。やや内湾しつつ直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめている。内外面ともミガキ調整が施されており、端部付近の内面は沈線状になる。14世紀。20・21は瓦質土器の煮炊具である。20は羽釜口縁部片で、鏝から口縁部にかけて内傾しており、口縁端部は面取りしている。内外面ともナデ調整で平滑に仕上げられる。14世紀の所産と考えられる。21は三足鍋の脚部片である。両端は折れているが、体部との接合箇所での剥離痕跡が内面に見られる。断面形状はほぼ円形だが、縦位に板ナデ痕跡が緩い稜として残る。上端付近の太さは2.8cmだが、下端に向けて細くなっており、下端では1.8cmを測る。



第13図 第2面出土土器

14世紀。20・21は瓦質土器の煮炊具である。20は羽釜口縁部片で、鏝から口縁部にかけて内傾しており、口縁端部は面取りしている。内外面ともナデ調整で平滑に仕上げられる。14世紀の所産と考えられる。21は三足鍋の脚部片である。両端は折れているが、体部との接合箇所での剥離痕跡が内面に見られる。断面形状はほぼ円形だが、縦位に板ナデ痕跡が緩い稜として残る。上端付近の太さは2.8cmだが、下端に向けて細くなっており、下端では1.8cmを測る。

## 第4節 第2面下層出土遺物

### 1. 出土状況

第1面の調査終了後、第2面への機械掘削に先立ち調査区東壁で土層確認のために深さ30cm程度の側溝を掘削した。この際、側溝底面付近より柱状片刃石斧の完形品が出土した。しかし、出土後すぐに取り上げられてしまい、インプリントも残っていなかったため詳細な出土状況は不明である。ただし、石斧に付着していた土壌と作業員への聞き取りにより東壁第3層（第6図）より出土したことが確実であったため、再配置して写真撮影を行った（写真図版6）。この土層は第2面よりも下層に位置し、調査終了時の下層確認トレンチで確認した低湿地埋土に相当する。すなわち、第1面SD01下層で出土した弥生土器と同時期のものと考えてよからう。

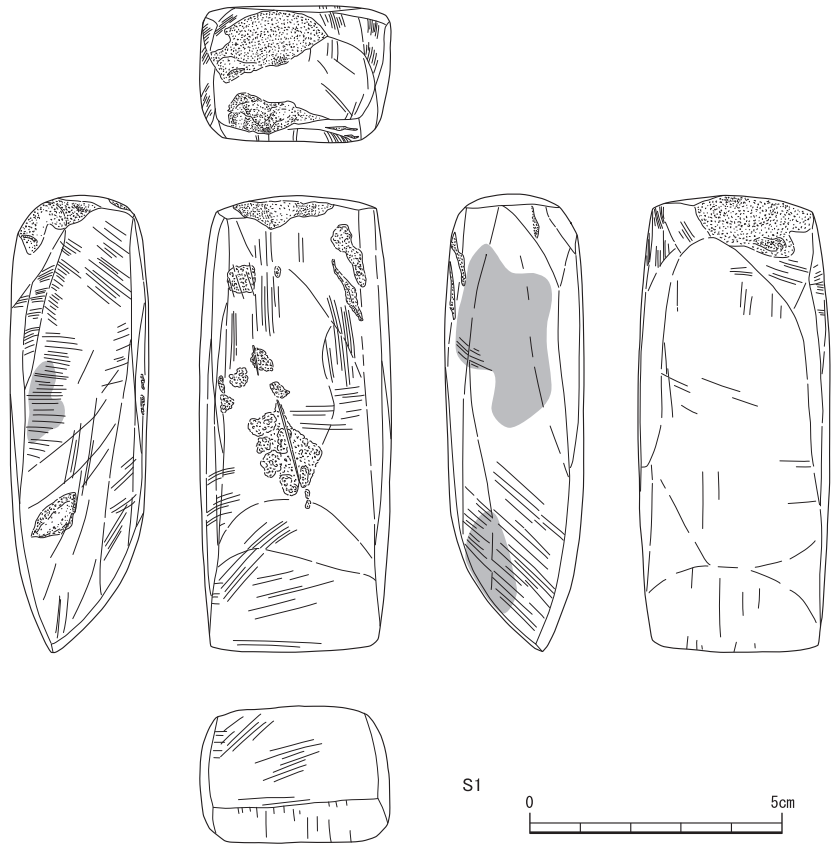
2. 遺物

S1は凝灰質砂岩製の柱状片刃石斧である(第14図、写真図版10)。側縁には明瞭に稜が見られ、断面は隅丸長方形である。両側縁が中央にむけてやや広がる、エンタシス状の平面形を呈する。

表面は中央付近を中心に一部側縁付近にも成形時の敲打痕が見られる。ほぼ全面に渡って研磨されているが、裏面に比べると擦痕がややはっきり観察できる。裏面は全体に丁寧に研磨され、擦痕もほとんど見えないが、基部に向けて稜が甘くなる。

両側縁は敲打痕がほとんど見られず、やや粗い擦痕が見られる。側縁中央部から基部にかけて褐鉄が薄く附着しているが、埋没時のものである。明瞭な着柄痕跡は見られない。

なお、上面は敲打痕によって稜が潰れているため、敲石に転用された可能性がある。



第14図 出土石器

## 第4章 まとめ

### 第1節 SD01より出土した昆虫遺体

#### 1. 資料

出土資料は原田西遺跡SD01の下層より出土した鞘翅目昆虫の左上翅で、わずかに前縁部を欠くものの、概ね全体をとどめており、長さは10mm、幅は4mmである。保存処理前には緑色を保持しており、表面には白色斑の散布が観察されることから、一見して、小型・緑色のハナムグリ類であることが明らかな資料である。

#### 2. 形態の特徴と同定

本資料には、下記のような特徴が認められる。

- (1) 上翅の会合部に沿って、弱い稜状の隆起線が認められる。
- (2) (1) 以外に、翅表の隆起線は認められない。
- (3) 上翅先端は突出しない。上翅先端の外方は挟られない。
- (4) 翅表には馬蹄形点刻が縦位に並ぶが、点刻は孤立的である。<sup>(1)</sup>

本資料に相当するような、緑色の上翅に白斑を散布するハナムグリ類としては、ナミハナムグリ (*Cetonia pilifera*)、アオハナムグリ (*Cetonia roelofsi*)、コアオハナムグリ (*Gametis jucunda*) アオヒメハナムグリ (オキナワコアオハナムグリ: (*Gametis forticula*) などがある。本資料の特徴のうち(2)により、ナミハナムグリは排除される。また本資料の計測値からみて、一般的なアオハナムグリよりかなり小型であることから、これも対象外としてよからう。

残る2種のうちアオヒメハナムグリは、上翅会合部に明瞭な隆起線を有しており、(1)の特徴と符合しないと考えられることから、本資料はコアオハナムグリ (*Gametis jucunda*) と判断される。



1mm

第15図 SD01出土昆虫遺体

#### 3. まとめ

コアオハナムグリは東アジアの旧北区を中心に分布する種で、日本では北海道以南、屋久島・種子島以北に広く分布する普通種である。成虫は晩夏～初秋に羽化して活動した後越冬し、翌春から再び活動するが、盛夏には個体数が減少するとされる。<sup>(2)</sup>

平地から低山～中山地まで生息し、都市部でも見られる。成虫はキク科、バラ科、ブナ科など多様な花に集まり、樹液にも来る。また幼虫は腐葉土を食する。

こうしたことから、原田西遺跡SD01の下層が形成された時期には、調査地点周辺に上記のような成虫の食料となる草本、木本類の繁茂があったものと推定される。また地層の堆積は本種が個体数を増す晩夏以降の時期であった可能性があろう。



## 第2節 SD01の位置づけ

### 1. SD01の概要

今回の本発掘調査の結果、調査区中央部で幅4.0～5.0m、深さ1.4mを測る断面V字形の大溝SD01を検出した。この溝は既往の調査で見つかったM2溝と連続するものであり、本調査区北隣の平成15年度調査区から昭和51年度調査区にかけて120mほど直進し、クランクした後もやや斜行しつつ150mほど直線的に北に延び、昭和58年度調査区において途切れている（第16図）。溝の開削時期についてはクランクやや南で方形掘方の掘立柱建物跡の柱穴を切っていることから、中世を遡らない可能性が高い。

### 2. 過去の調査例

この他に周辺の調査ではM1・M3・M4のほぼ同時期と考えられる溝が見つまっている。これらの溝は、以下の共通点とM3溝で人骨（頭骨）が出土していることから防御目的の施設の可能性が指摘されている。ただし、他に同様の施設が見られないことから溝全体の性格については明言を避けられている。

ここでは過去の調査で見つかった溝の特徴を改めて整理し、今回の調査内容と比較することでその性格について若干の検討を行いたい。

M1～M4溝は以下の共通した特徴を有していると報告されている。

- ①V字型の断面形状。
- ②水口や河川からの取り込み口がない。
- ③流水の痕跡がない。
- ④溝両肩口とも型崩れしておらず、存続が長期に及んでいないと考えられる。

### 3. SD01との比較

①は明らかにSD01と共通しており、②は今回の調査範囲では検証しえないので検討から除外するが、③と④について、SD01の層序を概観してみると既往の報告内容と若干の齟齬が指摘できる。

SD01は大きく上層・中層・下層に分けることができ、出土遺物から埋没時期にある程度時間幅を有していたものと考えられる。また、それぞれの埋土の大部分はブロックが多数含まれていることから人為的に埋められたと判断できる。しかし、それぞれの最下層付近ではラミナが幾重にも折り重なる状況が観察され、断面形状で最下部が箱形になっている点も水流によるものと判断すべきである。

したがって、SD01は各フェイズにおいて水路としての機能を有していた可能性が高い。SD01が水路であったとすれば、第2面においてSD01を境に水田区画が変わっていることも整合しよう。

溝の存続時期についても一考が必要であろう。層序と遺構面がそれぞれ対応している可能性が高いことはすでに触れた。これをまとめると、SD01と各面の時期的な対応関係は以下ようになる。

フェイズ1：下層と第2面の水田面が対応する。溝下層及び第2面包含層出土遺物から13世紀～14世紀前半に埋没したものと思われる。

フェイズ2：中層と第1面の水田ないし畑跡が対応する。溝出土遺物は無いが、西側肩部全面でみられる地滑り痕跡が手掛かりとなる。慶長伏見地震（1596）によるものと考えられ、16世紀末になお開口していたことを示唆する。

## 第4章 まとめ

フェイズ3：上層と第1面上位の水田跡が対応する。上層出土遺物から埋没は17世紀以降である。

このように、SD01は比較的長期間存続したものと思われる。今回の調査でも、SD01の周囲には柵跡など防御施設を示唆する遺構・遺物は一切見られなかった。むしろ、溝埋土と鋤溝や水田区画を有する各面が対応することを積極的に評価すべきではないだろうか。

## 第3節 まとめ

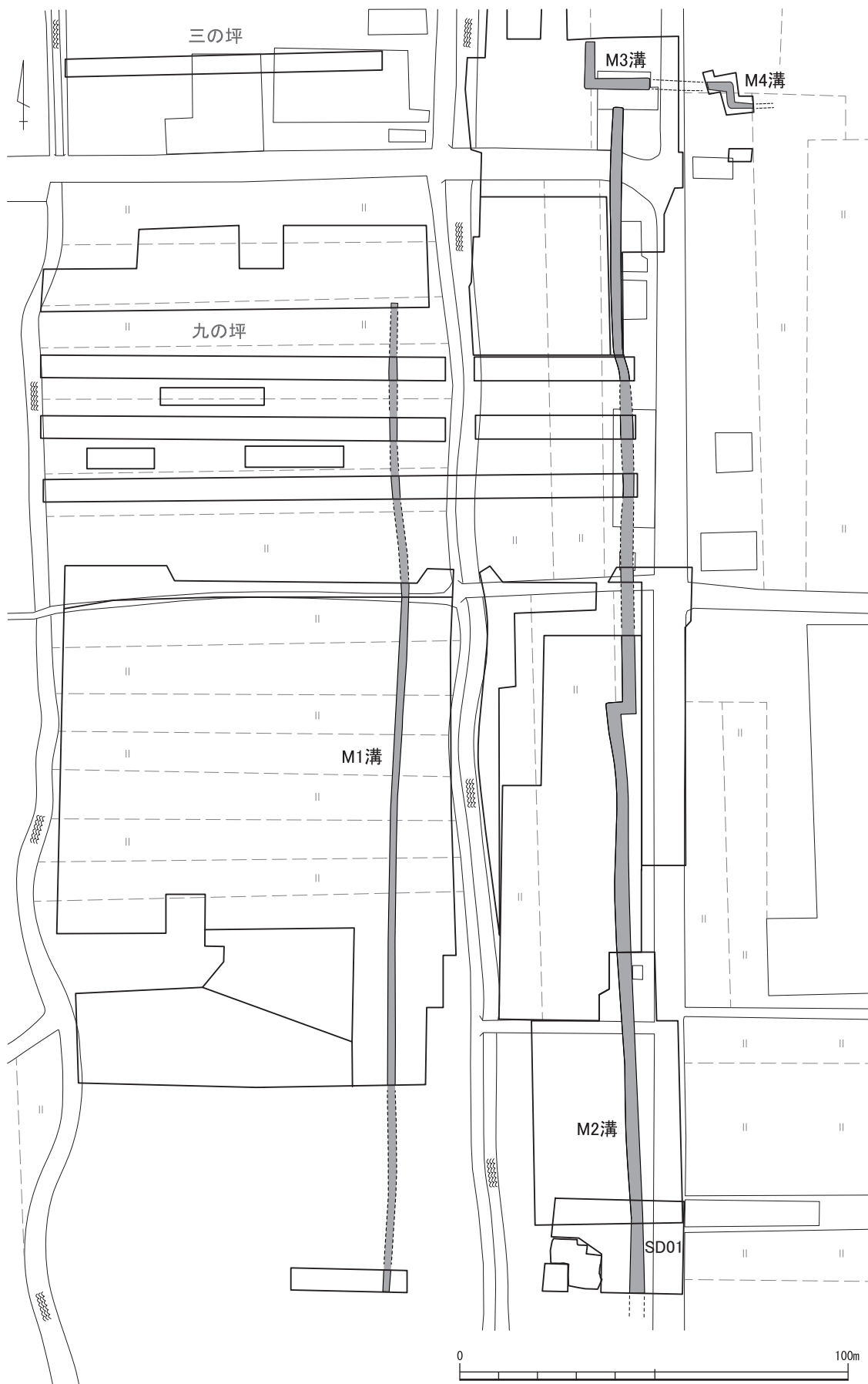
今回の調査では、上下2面の水田面とその各時期に伴う大溝を調査した。この大溝はかつての調査で水路としての機能については否定的な所見が示されていたが、今回の調査結果をみる限り水路と考えるのが妥当であろう。ただし、取水口に類する施設が過去の調査で見つかっていない点や、現在のこっている条里の地割と整合しない等、まだ解決すべき課題が残る。これについては今後より調査が進んだ時、詳細な検討を行う必要がある。

### 【註】

- (1) 日浦 勇・宮武頼 1985「第5章 北白川追分町遺跡出土の昆虫遺体」『北白川追分町縄文遺跡の調査』京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ
- (2) 岡島秀治・新谷邦雄監修 2012『日本産コガネムシ上科標準図鑑』学研教育出版

### ＜参考文献＞

- 兵庫県教育委員会 2009『原田西遺跡』  
尼崎市 1966『尼崎市史』第1巻



第16図 SD01と同時期の溝



第4章 まとめ

原田西遺跡出土土器観察表

NO.	種別	器種	出土地区	出土遺構	層位	法量(cm)			残存	備考1	挿図	写真 図版
						口径	器高	底径				
1	弥生土器	壺	A区	SD01	中層		(7.8)		頸部小片		10	10
2	弥生土器	壺	A区	SD01	—		(4.7)	8.1	底部3/4	アゼ崩し時	10	10
3	弥生土器	甕	A区	SD01	下層		(3.1)	(6.65)	底部完存	弥生旧河道	10	10
4	須恵器	杯A	A区	SD01	中層	(11.5)	(3.15)	(8.2)	口縁部1/7 底部1/4		10	10
5	陶器	播鉢	A区	SD01	上層		(3.9)		片口小片		10	10
6	青白磁	小壺蓋	A区	SD01西肩	下層	(7.6)	(1.4)		口縁部1/6		10	10
7	弥生土器	甕	A区		第1面	(12.6)	(2.5)		口縁部1/12		11	8
8	須恵器	平瓶	A区	鋤溝	第1面	(9.0)	(4.0)		口縁部1/9		11	8
9	須恵器	高坏	A区		第1面		(2.5)		脚部小片		11	8
10	黒色土器 (内黒)	椀	A区		第1面		(1.0)	(5.8)	底部1/4		11	8
11	瓦器	椀	A区		第1面		(3.3)		口縁部小片		11	8
12	土師器	小皿	A区	中世素掘溝	第1面	(9.8)	(2.05)	(7.5)	小片		11	8
13	青磁	椀	A区	鋤溝	第1面		(1.95)		口縁部小片	蓮弁文	11	8
14	弥生土器	高坏(脚)	A区		第2面		(4.3)		脚上部1/2		13	9
15	須恵器	蓋	A区		第2面		(3.2)		体部小片		13	9
16	須恵器	蓋	A区		第2面		(2.1)		口縁部1/12	南北アゼ出土	13	9
17	須恵器	杯身	A区		第2面		(1.75)		口縁部1/9		13	9
18	須恵器	杯A	A区		第2面		(2.8)	(8.7)	体部小片 底部1/6弱	機械掘削時	13	9
19	瓦器	椀	A区		第2面		(2.55)		口縁部小片		13	9
20	瓦質土器	羽釜	A区		第2面		(3.3)		口縁部小片		13	9
21	瓦質土器	三足鍋	A区		第2面		脚 (11.5)		脚部のみ		13	9

原田西遺跡出土石器・昆虫遺体計測表

No.	種別	種類	出土地区	出土遺構	層位	法量(mm)				残存	挿図	写真 図版
						長さ	幅	厚み	重量			
S1	石製品	柱状片刃 石斧	A区	側溝	暗褐色粘質土	90.0	38.5	27.5	190.6g	完形	14	10
	昆虫遺体	コアオハ ナムグリ	A区	SD01	下層	10.0	4.0			左上翅のみ	15	—

# 写真図版





調査区遠景（南上空から）



調査区遠景（北東上空から）





A区第1面全景 (南から)



A・C区第1面全景 (西から)



B区第1面全景 (南から)

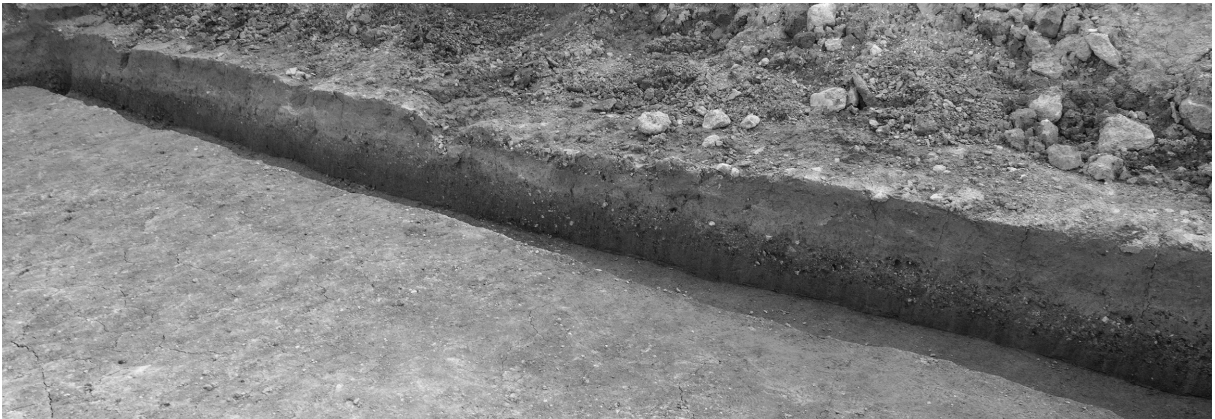




A区南壁土層断面（北西から）



A区南壁土層断面アップ（北から）



C区西壁土層断面（北東から）



C区南壁土層断面（北から）





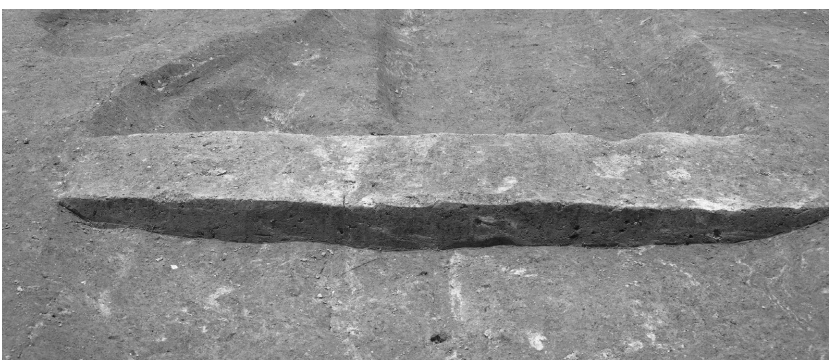
SD01北アゼ土層断面  
(南から)



SD01南アゼ土層断面  
(南から)



SD02土層断面 (北から)

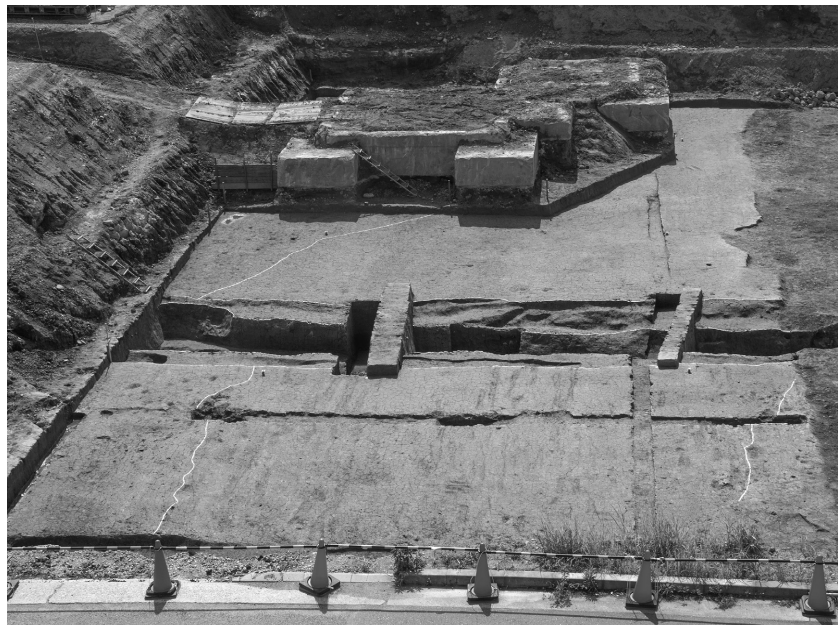


鋤溝土層断面 (東から)





A・C区第2面全景  
(南上空から)



A区第2面全景  
(東から)



B区第2面全景  
(西から)





柱状片刃石斧出土状況  
(北から)



柱状片刃石斧出土状況  
(西から)



下層確認トレンチ土層断面  
(北から)





盛土除去作業



盛土除去作業



スロープ仮設作業



SD01掘削作業



第1面遺構検出作業



SD01土層断面作成作業

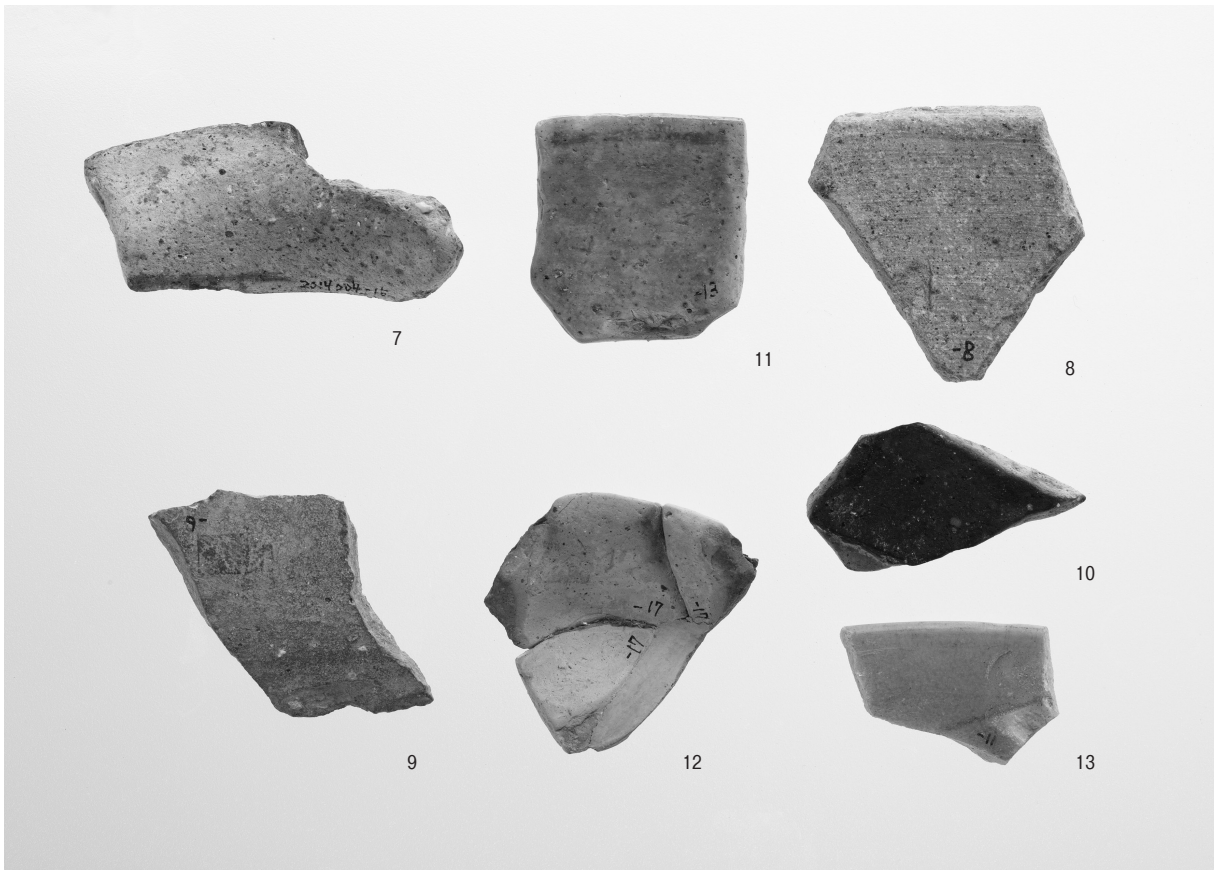


下層確認トレンチ掘削作業

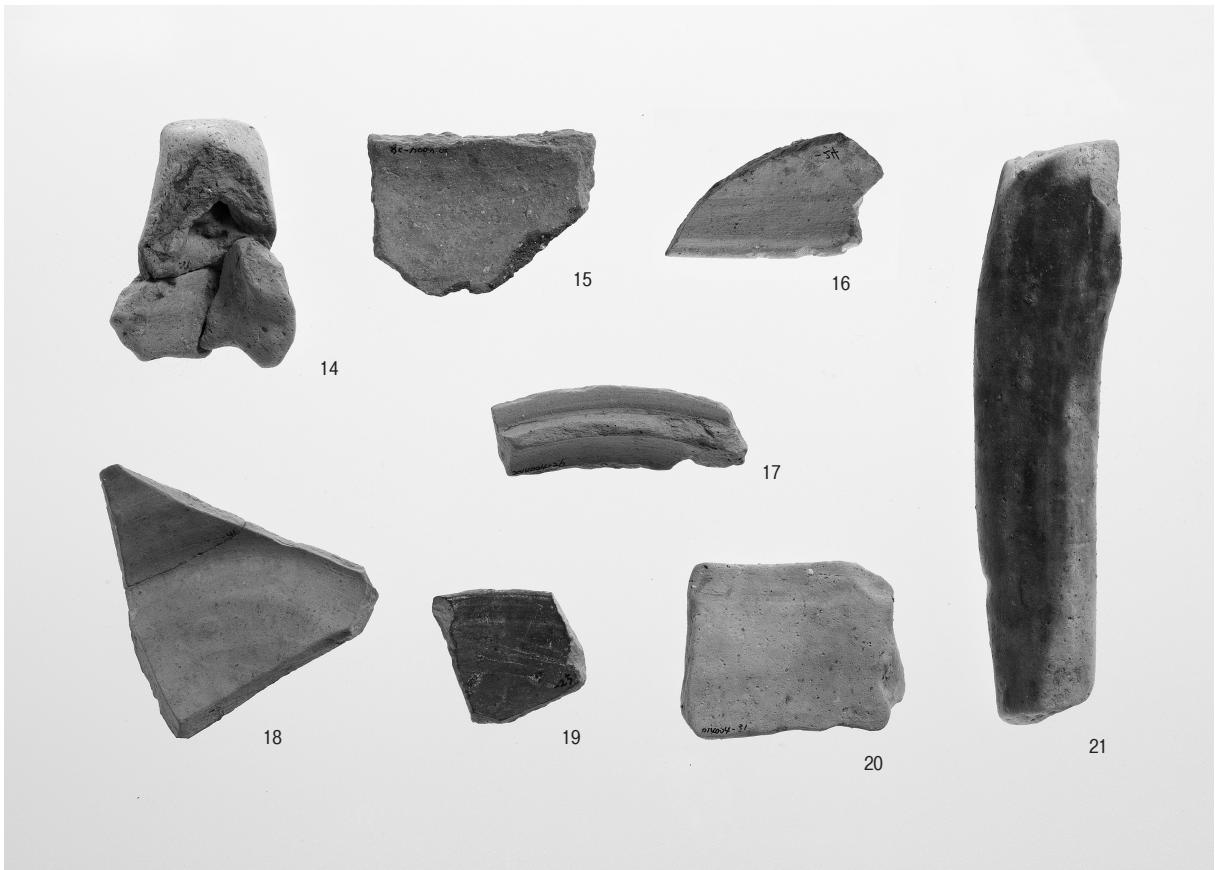
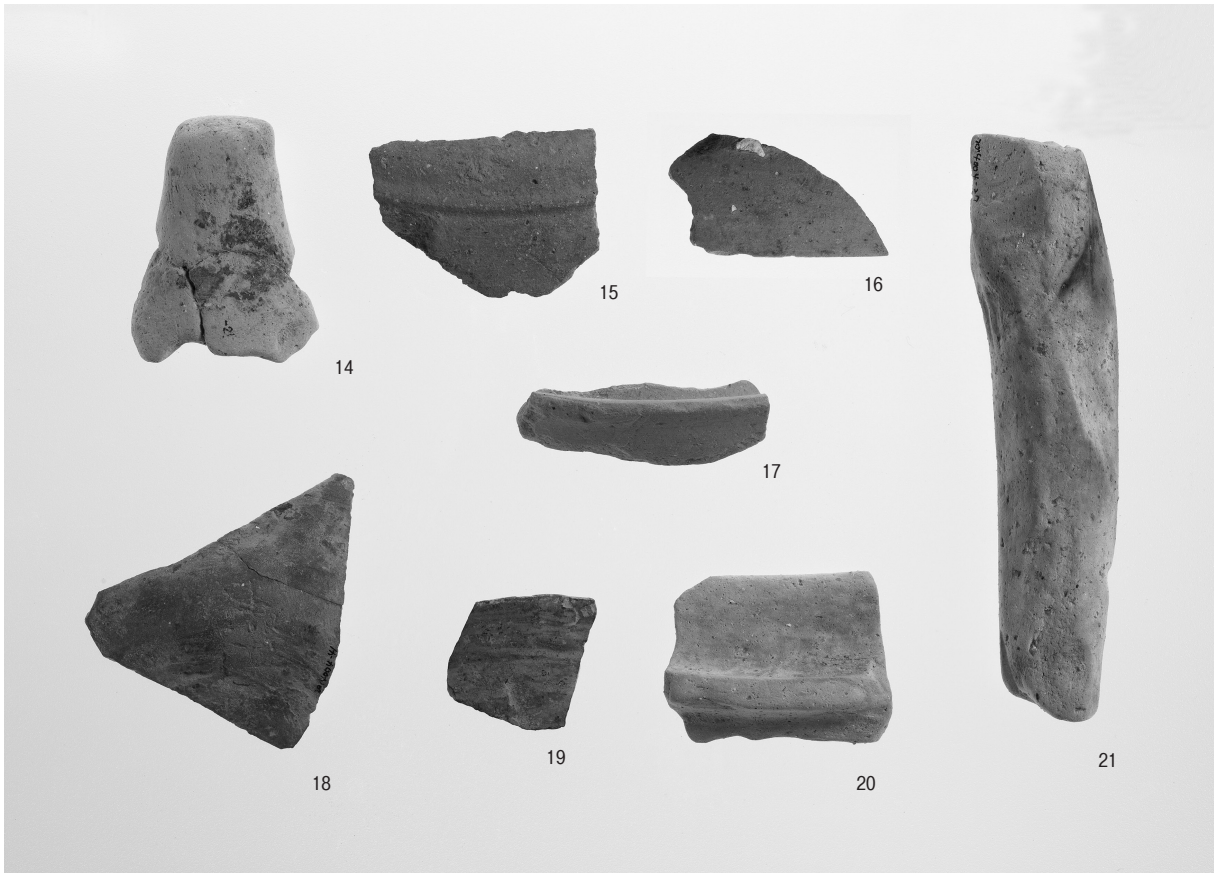


中間検査状況





出土遺物 1



出土遺物 2





出土遺物 3

S1

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	はらだにしいせき							
書 名	原田西遺跡							
副 書 名	猪名川流域下水道事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第509冊							
編 著 者 名	大本朋弥・久保弘幸・岸本一宏・池田征弘							
編 集 機 関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部							
所 在 地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号(兵庫県立考古博物館内) TEL 079-437-5561							
発 行 機 関	兵庫県教育委員会							
所 在 地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL078-362-3784							
発行年月日	令和2(2020)年3月31日							
資料保管機関	兵庫県立考古博物館							
所 在 地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL079-437-5589							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はらだにしいせき 原田西遺跡	いたみしいわや 伊丹市岩屋	28207	080082	34° 46' 19"	134° 26' 42"	平成26年6月2日 } 平成26年7月25日 (2014004) 平成26年11月4日 } 平成26年11月11日 (2014099)	794	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
原田西遺跡	集落跡	中世	溝・水田跡		青白磁壺蓋・瓦器椀・瓦質土器 弥生土器(壺)・柱状片刃石斧			
要 約	<p>中世の南北方向に流れる大溝と2面の水田及び畑跡を調査した。大溝は過去の調査でも検出されており、300mに渡って南北にのびることから条里に伴う水路と考えられる。</p> <p>大溝の中層と第1面、下層と第2面は時期的に対応しており、第1面は出土遺物及び溝肩部の慶長伏見地震痕跡と思われる地滑り跡から中世後期のものと思われる。</p> <p>第2面は水田面出土遺物から14世紀頃のものと考えられる。</p> <p>この他、水田面下層の旧流路埋土より完形の柱状片刃石斧が出土している。</p>							



---

兵庫県文化財調査報告 第509冊

伊丹市

## 原田西遺跡

－猪名川流域下水道事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

令和2（2020）年3月25日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部  
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号  
（兵庫県立考古博物館内）

発行：兵庫県教育委員会  
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：デジタルグラフィック(株)  
〒650-0043 神戸市中央区弁天町1-1

---

